

〈巻頭言〉

薬剤師は更なる高みを目指す



(前) 参議院議員・薬学博士・薬剤師
藤井 基之

我が国の薬学教育は150年前の1873年、5年制の大学教育でスタートしました。

1878年に1回生9名が卒業したと伝えます。その後、在学生在が減り存亡の危機に直面しますが、関係者の努力もあり1886年に3年制教育で復活します。また、薬剤師養成のために設けられた薬学専門学校等も幾多の変遷を経て、戦後1947年の学制改革により4年制大学教育となりました。そして2004年に薬学教育大改革とされる薬学教育6年制法案が成立し、2006年施行。すでに6年制卒業薬剤師は10万人を超えています。

念願の医薬分業は、長い眠りから目覚め、分業元年と言われた1974年以降急展開。院外処方箋発行枚数8億枚、分業率75%を越える状況になりました。一定の目標数値に到達した今日、国民の求める医薬分業、医療向上のための分業を具現化するために、官民をあげて傾注します。

「患者のため分業ビジョン～「門前」から「かかりつけ」、そして「地域」へ～」(2015年)にうたわれた「モノからヒト」への転換が進みます。令和6年度政府予算概算要求書には「DXの推進」(電子処方箋の普及拡大・機能向上等)、「地域における薬剤師サービス推進体制強化」(薬局機能の高度化、在宅薬物治療提供体制の強化、災害薬事コーディネーターの養成等)等のメニューが並びます。

新モダリティの出現もあり、医薬品は以前にも増して質・量ともに急速な拡がりをみせています。医療人としての「やさしさ」と、科学者としての「きびしさ」、その両者を併せもつ薬剤師は、国民医療の向上、公衆衛生の向上等のため、更なる高みを目指します。

今般、神奈川県薬剤師会名誉会員に推挙いただいたのを期に、改めて清水藤太郎8代県薬会長の名著『日本薬学史』(1949年南山堂)を読み返してみました。

著者は、戦後の混乱期の中にあって、日本の薬学・薬剤師の可能性を信じます。史実を詳述し、未だ実現していない医薬分業の実施を求め、また、中国医薬、西洋医薬に席卷された感の強い医薬の国産化、国内医薬産業の活性化を強く訴えるものです。

2020年2月クルーズ船の横浜港入港時には神奈川県薬剤師会会員薬剤師の活躍がありましたが、今般のCOVID-19は、海外同様、国内でも猛威を振るうこととなりました。ワクチン、治療薬はほぼすべて海外からの購入となってしまいました。歴史はパンデミックのくり返しの発生を証明しています。次のパンデミック時には世界に対し、日本が主体的に貢献したいものです。

1890年に26人で発足した神奈川県薬剤師会は、現在約4,000人の薬剤師が集い、10万人強の属する日本薬剤師会の中核の一翼を担います。

仲間の薬剤師とともに更なる高みを！